

将桃界はもっとひどい。新聞にいつも載る人たちは十数人。あとは黙々と将棋を指すが、その棋譜は日の目を見ずに生産されていく。新聞にも載らず、倉庫に保管されていく。一応記録なのだが誰も並べないし、あまり関心も持たれない。そして多くの棋士は、八段を目指すという希望よりも、落ちる心配を常に背中にかついで、死に物ぐるいで戦っている。荒い息づかい、嘔吐し、血尿を出し、目は焦点を失い、頬の肉はげっそりと落ち、駒持つ手は震え、負けた明け方に一人泣く酷薄な順位戦を戦って。そして、報われない。

あるときの鞆持ち旅行で、私は木村名人の機嫌のいいころあいを見はからって、「将棋が強くなるにはどうすればいいんでしょう」とたずねてみた。一瞬、名人はあきれたような顔をし、やがて笑いながら応えてくれた。

「将棋が強くなるにはだねえ、まず酒が好きなこと。次に女が好きなこと。そして、バクチが好きなこと。根っからこの三つが好きななら、最低でも八段にはなれる」

ひとを小バカにしたような答えが返ってきた。でも、みんな私の好きなもの、自信のあるものばかりだ。三道楽で八段になれるなら、こんなに楽なことはない。これが本当なら、私はあすにも八段だ。

「ノム」「ウツ」「カウ」の三拍子がそろったら、どんな人間でも金欠病にかかる。病を治すには金を稼ぐしかない。稼ぐにはどうするか。自分の本業に精を出すしか道ない。将棋なら将棋の道に励み、勝って稼ぐしかない。

負けられないと思えば、精神を集中してなんどでも読みなおすはずだ。その一生懸命さのつみかさねが、やがて将棋を強くする。すなわち八段も夢ではない。——これが木村名人に教えられたことだった。さすがに名人の教えはひと味違っていた。

岡潔「春宵しゅんしょう十話」

岡先生は将棋もだいぶお好きだったようだが、まさか将棋を念頭において書かれたわけでもあるまい。が、私にはずいぶん参考になった。そのなかで、とてつもない数学の大理論が一瞬にして解ける瞬間を表現して、「**紫の火花**」と形容している。また、一年も考えてわからなかった問題が、旅行先のベッドに横になったとたんに、すらすら解けた、という表現もある。

実にうまい表現だ。実際そういうものかもしれない。将棋でも、長考に長考をかさねた末に、バツと一瞬にしてそれまでわからなかった筋が読めるときがある。そういうときは、やはり紫の火花と形容するしかないような電光が走る。

村上春樹

僕は正直いって他人の肩を挟むのがあまり好きではない。前にも書いたように両親も女房も肩こりの体質なので、昔からよく肩を挟まされてきたが、これが嫌で嫌でしようがない。僕自身肩こりというものを経験していないから、肩こりがどういうもので、どうすればそれをほぐせるかということがまずわからない。わからないことをやっても、当然あまり面白くない。それでも両親の場合は肩を十分くらい挟むと小遣いをくれたりしたから、子供の頃の金ほしさで我慢してやってたけど、女房の場合はもちろん何もくれない。それどころかありがたいの一言もない。「ムム、そこ痛いわよ。下手ねえ」とか「もうちょっと身を入れてやってよ」などと叱責されるのがオチである。僕が文句を言うと「肩こりのこの苦しさを味わわなくて済むんだもの、それくらい他人に奉仕して当然でしょう」と反論される。「じゃあいいわよ、立場を変わりましょう」なんて言われるとそんな理屈があるもんかと思いつつも、あきらめてせっせと肩を凍み続けることになる。

退会の日

二〇一二（平成二十四）年三月、僕は奨励会を退会した。僕の退会によって、一九九六（平成八）年奨励会入会組の「全滅」が確定した。